

施工写真提供：(株)彩園 木下専務の撮影真：本誌



Before: 「草がボーボーで庭を造り変えたい」という現場が、右の写真のように生まれ変わった



気軽に庭に出て家族や友人と食事を楽しめる、テラススペースを設けた活用する庭となっている。食事以外にも、レンガづくりのバーベキューコンロが空間にぬくもりを与え、植栽の彩りを楽しむつるぎのスペースとして、日常的に楽しめる空間になっている

庭の困りごと相談を、単なる解決策で終わらせない！

(株)ユニソン及び(株)ユニソン西日本

(浅岡直人社長)主催の「ユニソンフォトコンテスト2016」のトップ賞にあたる『ゴールド賞』を受賞した(株)彩園を訪問。今回の作品を手掛けた木下恵介専務に話を聞いた。

●仕事のスタイル

福岡市で造園・エクステリア業を営む(株)彩園は、下請け仕事なしで、すべてエンドユーザーを相手に仕事をして

「ユニソン フォトコンテスト2016」のゴールド賞

いる。施工も自社スタッフのみで対応。チームを統率する木下恵介専務は、「お客さんに後悔だけはさせたくない。だから最初に、その庭の最大限の可能性を提示してあげます」と言う。今回、ゴールド賞を受賞した物件も、そうした姿勢によって実現した庭だった。

●最初は「草を何とかしてほしい」という困りごと相談

写真を見ても分かる通り、受賞作品はとても素晴らしい快適空間。しかしこの空間は、そもそも「草がボーボーになっているので、何とかしてほしい」という困りごとの相談から始まった。お施主さんは、交友関係も広く生徒もたくさんいるピアノ教室の先生(奥さん)一家。そのため自宅にはたくさんの方が訪れ、いつも賑やか。せっかくなので、木下



採用商品:『ディアナブリック』(レンガ)積み上げた時からレンガが語り始めるかのような多彩な表現力が特徴。色が重なり合うように焼き上げたエイジング加工により、時を経たアンティークレンガのような多彩な表情を感じさせる

(株)彩園 (福岡県小郡市)



木下恵介専務

専務は庭を「草を取るだけではない。集いの場所にして

みてはどうか」という提案をした。

プランを作り提案してからは、お施主さんからはほとんどお任せで進んだ。「こんな場所ができるなんて、お客さんは初めから想像もしていません。それを教えてあげることが、最大限の提案をすることだと思っています」と語る木下専務。彩園との出会いがなければ、もしかしてこのお庭も砂利か芝生を敷いて終わりだったかもしれない。

●自社直営チームの強み

施工はほぼお任せで、クレームもなく進んだ。木下専務は「設計図面、現場、スタッフ、そしてお施主さんまでが、一体のチームとして仕事を進めているからだと思っています」と話す。これが下請けだと、職人は言われたまま、こなす。仕事となる。そのため臨機応変な修正が難しく、どうしても無難な方向に走る。それはお客様思考ではなく、職人が楽になる・クレームにならないようにする、という安全思考でもある。



タイルテラスとレンガで形成した寛ぎ空間。庭としての基本要素を成立させた上でバーベキュー、水回りを設置。お客さんは、朝・昼・晩と庭を活用し使い勝手も良いと喜んでくれるという

「現場は生き物です。だから収まりも図面通りにはいきません。逆に言えば自在なので、チームである我々の強みが発揮されるのです」(木下専務)。

●造園の仕事は作業員や肉体労働者ではない

造園・エクステリア業界で深刻化する、数年後の職人確保の課題。東京オリンピックの終了後には、職人の高齢化による引退が続くことも予想される。木下専務も「いかに若い人材を育てるか」が大きな課題だと思っている。

「造園の職人は、単なる肉体労働者とか作業員ではない。住まいという見方をすれば、我々の業界は、最後の見栄えを施せる場所にいます。一番良い場所です。そういう楽しさを知ってもらいたいです」。

木下専務は、将来は精鋭のマイスターでチームを作り、ホームガーデンにもプロとして貢献していきたいと話してくれた。